

## 科学研究費助成事業（科学研究費補助金）研究成果報告書

平成24年 5月18日現在

機関番号：13101

研究種目：基盤研究（C）

研究期間：2009～2011

課題番号：21520666

研究課題名（和文）蔵ネットワークの視点からみる日本近世の流通構造とそその変容の研究

研究課題名（英文）A Study on the Distribution Structure and its Changes of Early Modern Japan from the Viewpoint of KURA(Warehouses) Network

研究代表者

原 直史（HARA NAOFUMI）

新潟大学・人文社会・教育科学系・教授

研究者番号：70270931

研究成果の概要（和文）：性格の異なる複数の蔵の結びつきによる物資流通という、蔵ネットワークの視点に基づくことで、近世後期の新潟湊とその後背地における、多様な商人の重層的な展開とその複雑な結びつきによる米穀流通の構造が、明らかになった。またそれに伴い、商品とその所有権が分離して移転する様子も見いだすことができた。こうした構造こそが、流通ヘゲモニーの掌握の前提であり、それは地主にとっても領主にとっても同様であった。

研究成果の概要（英文）：The structure of rice distribution, that is composed by multi-layered and complex connection of a variety of merchants, in the area of later early-modern NIIGATA harbor and its hinterland, became clear, by the viewpoint of KURA (warehouses) network, the connection of warehouses of various characters. And also, we found out the fact that the goods itself and its ownership moved separately. To seize the hegemony of distribution, this structure had importance, for both land owners and lords.

交付決定額

（金額単位：円）

	直接経費	間接経費	合計
2009年度	1,000,000	300,000	1,300,000
2010年度	700,000	210,000	910,000
2011年度	500,000	150,000	650,000
年度			
年度			
総計	2,200,000	660,000	2,860,000

研究分野：人文学

科研費の分科・細目：史学・日本史

キーワード：日本史・日本近世史・流通史・蔵ネットワーク

## 1. 研究開始当初の背景

本研究代表者（原）は以前より、日本近世の物流・商品流通を主な研究対象として来た。吉田伸之の都市社会史研究等にも学びながら研究を進めるなかで、流通の具体的な場の構造に即した社会的諸関係の分析に基づいて、流通の全体像を解明することが、1970年代の幕藩制構造論と結びついた幕藩制的商品流通の議論を発展的に乗り越え、新たな展望を切り開く上で決定的に重要であると考えるに至った。

一方、平成13～14年度の科学研究費補助金をうけた基盤研究（C）「地主作徳米商品化過程の研究 - 地域社会構造論へのアプローチ -」の成果のひとつとして、地主作徳米流通において地主蔵所が独自の機能を有していたこと、こうした地主蔵所や領主の蔵所と連携する形で廻船問屋の米穀販売が成立していたこと、などを明らかにし、複数の蔵を連携したものとして捉える観点の重要性を見いだすに至った。

さらに平成15～19年度の科学研究費補助

金をうけた特定領域研究(計画研究)「中世考古学のための日本中世・近世初期の文献研究」に研究分担者として参加し、集散地遺跡論の深化にむけて考古学研究者とも交流しながら議論していくなかで、具体的な「蔵」という空間の特質をより深く考察していくことの重要性を認識するに至った。

## 2. 研究の目的

本研究はこうしたこれまでの自身の研究を受け、これをさらに発展させるものとして位置づけられる。本研究では、まず近世日本の物資集散地における諸種の蔵を典型的に把握したうえで、これらが個別に果たす機能のみならず、とりわけ物流・商品流通の各段階において、相互に連携しつつ全体としていかなる機能を果たしているのかを明らかにすること、を第一の目標とする。すなわち「蔵ネットワーク」の存在と機能を実証的に明らかにすること(課題a)である。

さらにはこうした静態的な構造の把握にとどまらず、とくに19世紀に向けた社会と経済の変動のなかでこれらの「蔵ネットワーク」がいかなる歴史的展開を遂げるのか、という点を明らかにしていく。すなわち「蔵ネットワーク」の変容の解明(課題b)である。

そして最後に、こうした「蔵ネットワーク」の構造と変容から、当該期の物流・流通の構造と変容のいかなる特質が導き出せるのかを考察し、流通の具体的な場に即した日本近世における流通の全体像を展望すること(課題c)が課題となる。

## 3. 研究の方法

具体的な研究は以下のような手順で進められた。

### (1)対象地の選定

本研究の対象地として、a新潟湊とその後背地を設定した。同地域は日本海海運における有数の湊町新潟との関係において、盛んな物資流通が行われたこと、とりわけ地主制の発展による19世紀以降の変容や展開が予想できること等によるものである。

またb江戸および大坂を副次的な対象地として選定した。江戸・大坂は全国的な物資の集散地であること、都市社会史研究の蓄積が豊富なこと、流通により新潟地域と実際につながる側面を有することなどから、主対象地域の比較対象として、また連携する地域として調査検討することが、本研究にとって有効であると判断されたことによる。

### (2)既刊史料からのデータ収集

上記aおよびbについて、データの収集をおこなった。その際特に上記a地域については、できる限りその全域にわたり、かつ個々

の百姓・町人の蔵、地主の蔵、村の郷蔵、領主が設定した蔵といった、それぞれの性格の異なる蔵を網羅的にピックアップするべく、研究補助者を雇用して作業をおこなった。

その結果、新潟市を中心に旧中蒲原郡・北蒲原郡・東蒲原郡・西蒲原郡・南蒲原郡・古志郡のほぼ全域にわたり、およそ蔵に関係する史料のデータ(場所・年代・種類・設置主体・機能等)を収集することが出来た。

一方b地域に関する既刊史料データについては、史料集の購入などをおこないつつ適宜参照した。

### (3)未刊史料の調査・収集

主対象地域aにおける主要未刊史料として、とりわけ地主の蔵、および湊町新潟に設置された各種の蔵に関わる下記の史料を、実際に調査し、主要部分を撮影ないし写真版複写の形で収集した。

新潟大学付属図書館蔵白勢家文書

同 五十嵐家文書

新潟市歴史博物館蔵新潟町会所文書

また、b地域である江戸・大坂に関する未刊史料については、国文学研究資料館・東京大学史料編纂所等において検索と一部撮影をおこなった。

### (4)分析

上記の各収集データ・史料をもとに分析をおこなった。当初とくに既刊史料から得られた新潟湊後背地の大量なデータをもとに、GIS的手法も加味した定量的分析の可否を検討したが、各典拠史料集の収録方針の違い等により精粗の差が大きいことから、断念をせざるを得なかった。

したがって、実際の分析は、広域の大量なデータによって得られた概括的な知見に基づきつつ、集中的に収集した未刊史料にみられる地主の蔵所と湊町の蔵とを核とした、内在的な分析が中心となった。

なお、分析の際には、蔵に収納される物品の中でも中核的な、米穀の流通・移動・保管を中心として検討をおこなった。

## 4. 研究成果

### (1)研究の主な成果

本研究の結果明らかになったのは、主に以下の諸点である。

当地域の米穀流通に際しては、年貢米と地主作徳米が合わさってひとつの市場を形成するため、地主の蔵のみならず、郷蔵や城下における領主の蔵、湊町の領主蔵と商人蔵、といった性格の異なる複数の蔵の間を、米が移動していく。これが当地の蔵ネットワークのひとつの特徴を形作る。

このような蔵ネットワークの存在は、冬期における米穀移動の困難さ等とも結びついて、個々の蔵において同時に所有主体などが異なる多様な性格の米が併存するという事態をもたらす。

当地域の地主作徳米販売に際しては、売り手である地主と湊町の廻船問屋、そして買い手としての廻船商人（北前船主等）という流れを核としながらも、さらに多様な各種の仲買商人や、新潟湊に必ずしも収斂しない活動を行う浜方の廻船商人など、多様な担い手が関与し、地主相互の取引も行われる。こうしたレベルの異なる様々な商人が湊町・城下町、在町、農村に重層的に展開するなかで、それらが複雑に結びつくことで、当地域での米穀流通が成立する。大地主や廻船問屋による流通上のヘゲモニーの掌握は、こうした構造を前提にはじめて理解することが出来る。

前記蔵ネットワークの存在に基づきつつ、当地域では、現米が一定期間蔵にとどまる一方で、それとは独自に所有権が移動するという事例が多く見られる。これは推し進めれば米切手のような証券の流通にも繋がる方向性であり、当地域の米流通の担い手の経営のありかたの評価は、こうした面にも注目しつつなされていく必要がある。

当地域において、以上で見たような重層のかつ多様な商人に媒介され、複数の性質の異なる蔵を結びながら行われていく米の移動は、単に商品としての米の流通にとどまらない。領主の廻米もまた、商品として市場に放出された米の再購入も含めて、こうしたネットワークの一端を把握することで実現可能になる例が見られる。さらにまた、新潟湊での救恤に関わる米の確保もまた、単に町における貯穀蔵の設置だけでなく、こうしたネットワークを前提として実現していた可能性が想定できる。

#### (2)得られた成果の内外における位置づけ

日本近世史研究において、これまで複数の蔵をネットワークで結ばれたものとして意識的に捉えて研究が行われたことはほとんどなかったといえる。例えば商品流通の場において、蔵は単に商品を保管するというだけでなく、在庫や価格の調整という重要な役割を果たしていたことは、従来すでに指摘されているところであるが、これが個々の蔵のみならず複数の蔵のネットワークで実現していることや、米穀売買における地主蔵所と領主蔵所の関係など、諸種の蔵の相互関係を念頭に置いたうえでの検討は、これまでなされることがなかった。またこうした一時保

管という蔵の機能への着目は、具体的流通過程における「時間」の要素へのあらたな注目に結びつくものである。

したがって、蔵という一点に絞って、諸種の蔵を総合的に捉えた上で、その具体的な相互の連携のあり方を解明するという方法的視覚そのものが、本研究における独創的なものであった。

こうした視点に基づいて行った検討の結果、特に当地域における多様なレベルの商人の重層的な展開と、その複雑な結びつきという、米穀流通の構造を明示することが出来たこと、また特に蔵の機能に基づいて、現物の商品そのものとその所有権とが分離し、別個に移動していく様子を見出すことが出来たことは、この視点が具体的な場に即した歴史的事象の把握にとって有用であることを示すであろう。

また、さらにこうした構造の中で、地主作徳米と年貢米とがともにひとつの市場を形成し、相互に密接に関わりながら流通している実態は、領主的商品流通から農民的商品流通へという日本近世流通史研究における古典的な枠組みが、必ずしも単純には適用できないことを示しており、そうした視点を発展的に乗り越えるための展望をはらんでいるということが出来る。

#### (3)今後の展望

本研究で主として明らかにしたのは、あくまでも新潟湊とその後背地という地域における実態であり、ここで示された諸要素が、当該地域の特質に基づくものであるのか、また当該期の列島の社会において普遍的な意味を持つものであるかという点については、他地域での実例などと対照させながら、なお慎重に判断する必要がある。

また、分析の主な対象が、19世紀前半期にほぼ集中したため、当該期において上述したような流通構造が成立していたことは示せたものの、その始期や変容について明瞭に示すことが出来なかった。すなわち冒頭で示した課題bについては十分に達成することが出来なかったということになる。ただし18世紀半ばがその始期であること、また幕末にかけて変化がみられること等は予見することが出来ており、今後そうした点を実証していく必要がある。

これらを通じて「流通の具体的な場に即した日本近世における流通の全体像を展望すること」すなわち冒頭で示した課題cが、より明瞭な像を結ぶことになると予想される。

#### 5. 主な発表論文等

(研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線)

〔雑誌論文〕(計1件)

原直史、地主史料からみた近世蒲原平野の米穀流通、資料学研究、査読有、第8号、2011、1-30

〔学会発表〕(計1件)

原直史、新潟湊をめぐる米穀流通、円座「近世都市における流通・運輸と身分的周縁」(近世大坂研究会、大阪市立大学 GCOE 都市論ユニット等の共催企画)、2011年1月11日、大阪歴史博物館

## 6. 研究組織

### (1) 研究代表者

原 直史 (HARA NAOFUMI)

新潟大学・人文社会・教育科学系・教授

研究者番号：70270931